

奥日野の製鉄技術が幕末の薩摩に伝わる

たたらフォーラム2019

2月24日、伯耆国たたら顕彰会（田貝英雄会長）主催の「たたらフォーラム2019」が、町文化センターで開かれました。

今回は、田貝会長による顕彰会の事業計画の報告の後、元鳥取県史編さん室長の坂

本敬司さんによる基調講演が行われました。坂本さんは、自身が研究している「鳥取藩家老日記」などの文書から、江戸時代の奥日野の鉄山師や当時の鉄の流通事情などを読み解いた成果を発

表しました。

さらに、県立公文書館専門員の池本美緒さんによる「鋼師、薩摩へ行く」と題した講演も行われました。

池本さんは、江戸後期に、日野郡の「村下」（たたら操業の総責任者）が薩摩（鹿児島）へ派遣され

た際の、鳥取・薩摩両藩の記録をもとに発表。日野郡の良質な鋼を作る技術が遠く九州までもたらされ、日本最初の洋式産業群「集成館」の成立にも寄与したのではないかとの説を述べました。

このほかにも、顕彰会事務局長の藤原洋一さんが、根雨の鉄山師・手嶋家が経営していたたたら跡の調査報告を行うなど、往時の隆盛の軌跡をたどる、盛りだくさんの内容となりました。



毎年、日南町と交互に開催されているフォーラム

地域で愛される風物詩

菅福地区伝統奇習行事「ホトホト」



水かけ派手に厄流し。ホトホト役も一苦勞

みのかさ姿のホトホト役に水をかけて厄を払う、菅福地区の伝統奇習行事「ホトホト」（里山元氣塾主催）が、2月9日に行われました。これは、厄年を迎える人の家庭に、神の使い「ホトホト」が、お札やわらの馬、しめ縄などの縁起物を持って訪れ、家の人から祝儀の品を受け取って帰るところに水をかけると厄が落ちるというもので、古くから菅福地区に伝わる伝統行事です。

今年は、数え年で61歳を迎える2軒の家庭で行われ、「ほとほと、ほとほと」と言って訪れたホトホト役の男性らに、家族などが総出で水をかけ厄を落としていました。

活気あるまちづくりに役立てて

町観光協会が収益金の一部を寄付



町長を囲み笑顔を見せるスタッフの皆さん

2月26日、町観光協会（小谷澄男会長）が、平成30年度の日野町観光物産館金持神社札所および金持テラスひの・宝くじ売り場の収益金の一部200万円を町に寄付しました。

当日は、小谷会長ら協会役員やスタッフらが町役場を訪れ、堀田町長に寄付金を手渡しました。

「まちを訪れる人が笑顔になれるよう役立ててほしい」と小谷会長。堀田町長も「皆さんの思いを大切にしながら、観光振興に活用したい」と感謝の気持ちを伝えていました。



古の和歌の世界にふれる

古民家「沙々樹」で百人一首かるた大会



お気に入りの札を見つけるのも楽しみのひとつ

各家庭で正月に楽しまれていた百人一首に親しんでもらおうと、奥日

野ガイド倶楽部（佐々木彬夫会長）主催の百人一首かるた会が、古民家

「沙々樹」（舟場）で開かれました。

今年で2回目のかかるた会には、前回よりも多い16人が町内外から参加し、二人一組でチームを組んでの対戦を楽しみました。

参加者は、競技かるたをしている人や、子どものころに経験したことのある人などさまざま。全くの初心者でも、慣れてくると札を取って歓声を上げたりと、思い思いに百人一首の世界を楽しんでいました。

ふるさとのことば

～日野弁なんずかんず～ 第68回

まぼろしの「河井村」？

皆さんは、奥日野の「河井村」をご存知ですか？

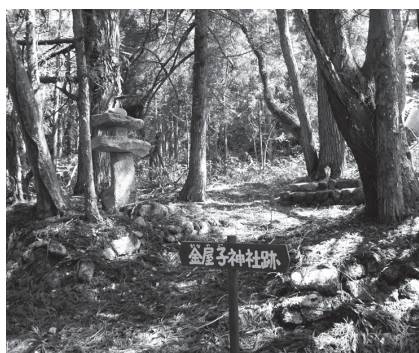
知っていても無理はありません。「河井村」とは、鎌倉時代の日野郡の有力武士、「日野氏」の所領だったといわれる、今では存在しない村だからです。

1272（文永9）年の備中平川家文書に、「伯耆国日野東条内河井村下原口・田野原・小倉」とあり、日野重長の遺領として、息子・刑部乙丸に与えるようにと記されています。

さて、その河井村がどこにあったのか。実ははっきりとはわかっていません。しかし、先ほどの文書中の地名に似たものを探してみると、福長に「下モノ原口」、中菅には「小倉原」、上菅に「御蔵前」、日南町生山に「田ノ原」などがあり、黒坂から日南町にかけての日野川水系沿いだったのではないかという説もあります。

忘れられがちな、地域に残る「小字」の名前は、地域の歴史の証人でもあるのです。

協力：日野町歴史民俗資料館友の会



奥日野のたたらを象徴するシンボリックな遺跡として都合山がある。場所、上菅集落の北端から花口へ向かう旧街道の山中になる。この道沿いには多くのたたら跡が集積しているが、集落から

たたら

文＝伯耆国たたら顕彰会
副会長 佐々木幸人

第10回
「都合山」

たたらマイスターが、あなたを奥日野たたらの世界に
ご案内します。

30分ほど歩いた最大の遺跡が、近藤家の操業した都合山である。近隣の人向山から明治22年に移転した都合山は、明治32年に菅福山に移転するまでの10年間操業している。

には集落が残っていたとも伝えられている。

平成20年には島根県の角田徳幸先生が発掘調査をされ、高殿、炬、大鍛冶場などの詳細な地下構造が分かった。このときの調査報告書もまた本になり、たたら楽校でも販売されている。

都合山が特に有名になったのは、東京帝国大学の俵国一先生が明治31年に操業当時の様子を調査し、記録に残された点にある。その調査論文はのちにドイツで発表され、「古来の砂鉄精錬法」（日野町図書館蔵）として本にされ、現在でもたたら研究の銘著となっている。

この場所の建築物は解体され菅福山に移転したと思われるが、その後、再開発もされず当時のままの地形で良く残っている。また、昭和初期までこの山内

近藤家は、製鉄炉の近くに鉄加工のための大鍛冶などの加工施設を持ち、粗鉄生産から製品化までを一元的に行うことによって輸送コストなどを削減し効率化を図った。そうした奥出雲などの鉄師との違いを顕著に見ることのできる遺跡でもある。